

プロジェクト成果報告書

1. プロジェクトリーダー

一橋大学 ソーシャル・データサイエンス研究科 教授
檜山 敦

2. プロジェクト期間

令和4年4月1日 ~ 令和5年3月31日

3. プロジェクト名

「貢献寿命延伸への挑戦！～高齢者が活躍するスマートコミュニティの社会実装～」

4. プロジェクトの概要

本プロジェクトは、「長生きを喜べる長寿社会（※1）」の実現に向けて、「貢献寿命¹（※2）”という新たな長寿価値（概念）を導入し、GBER²というICTを駆使して貢献寿命の延伸を目指す全員参加のスマートコミュニティを実装していくことを目的とする。

（※1）本プロジェクトが目指す「長生きを喜べる長寿社会」（理想の未来社会）

◆何歳になっても社会とつながり、役割を持って生きる、些細なことでも「ありがとう」と感謝されるそうした自己であり続けられる、そうした高齢期の日々を最期まで歩んでいける社会

（※2）貢献寿命の仮定義（本プロジェクトが定める新たな概念）

◆社会とつながり役割を持ち、誰かの役に立つ、感謝されるといった関わりを持ち続けられる人生期間

既往研究から人々にとって社会とつながり役割を持つことが、心身の健康と well-being に大きく寄与し、死亡率の低減にもつながることが示されてきた。さらには、単に社会とつながるだけでなく、誰かを支え、役に立っていると感じられることが心身の健康につながることも示唆されている。これらの知見を合わせると、心身が健康な高齢者を増やすだけでなく、仕事を含め社会とつながり役割を持ち、誰かの役に立つ、感謝される、といった関わりを持つ人が増えることが、「真に長生きを喜べる長寿社会」の実現には不可欠であると考えられる。

しかし、60歳や65歳に達すると仕事や社会的な役割から「引退」し、高齢者を社会に「支えられる人」とする社会制度や社会通念は根強い。本プロジェクトメンバー³らがこれまで取り組んできた、高齢者がその知識や経験を生かして地域社会の課題解決に関与する「生きがい就労」のシステム開発と社会実装の経験から、打開すべき課題は、1) 就労や社会参加が高齢者の心身の健康維持・増進にもたらす効果が見えづらく、どのような活動が生きる喜び、心身の健康に結びつくかがエビデンスで示されていないこと、2) 企業や地域社会側が、年

¹ PJメンバーである秋山弘子（東京大学名誉教授）が考案した概念。「貢献寿命の延伸を」（長寿科学振興財団「健康長寿ネット」2022年11月） <https://www.tyojyu.or.jp/net/topics/tokushu/koreisha-shuro-shakaisanka/kokenjumyo-enshin.html>

² PJ代表である檜山敦（一橋大学ソーシャル・データサイエンス研究科教授）が開発したICTプラットフォーム（ウェブアプリ）。GBER：Gathering Brisk Elderly in the Region（「地域の元気シニアを集める」の意味）

³ 檜山敦（一橋大学ソーシャル・データサイエンス研究科教授）、秋山弘子（東京大学名誉教授、東京大学高齢社会総合研究機構／未来ビジョン研究センター客員教授）、菅原育子（東京大学高齢社会総合研究機構 客員研究員）、吉田涼子（東京大学高齢社会総合研究機構 学術専門職員）、今城志保（㈱リクルートマネジメントソリューションズ 主幹研究員）、前田展弘（㈱ニッセイ基礎研究所 ジェロントロジー推進室 上席研究員）※順不同

齢にかかわらず活躍できる多様な働き方や参加の機会を十分に発掘できていないこと、の2点にあると分析する。本プロジェクトでは、この2点を打開するために、高齢者の就労、社会参加、人と社会とのつながりを包括する「貢献(engagement)」概念を再定義し、客観的な行動と主観的な評価から「貢献寿命(engaged life expectancy)」を指標化する。そして、GBERを用いて簡便に計測し、可視化できるようにすることをめざす。同時に、高齢者の「貢献」を可能にする社会環境が提供できているかを評価する地域社会向けの指標も構築することで、個人の行動変容を促すAIレコメンデーションツールに加えて、地域社会側の環境整備を効率化するツールとしてGBERに搭載することを目標として設定する。

こうした機能拡張をはかったGBERを実際の地域⁴で運用及び検証し、地域コミュニティに広く貢献寿命延伸に向けた動機づけをはかりながら就労や社会参加を含む貢献活動の機会増大に取り組んでいく。その成果をもとに貢献寿命の延伸をはかるGBER活用地域(スマートコミュニティ)の多地域展開を進める。なお、これらを進めていくにあたり、本プロジェクトでは下図に示す5つのタスクを同時に進めていく計画にある。

<プロジェクトの全体概要(主なポイントとGBERのイメージ)>

◆「長生きを喜べる長寿社会」(=理想の未来社会)

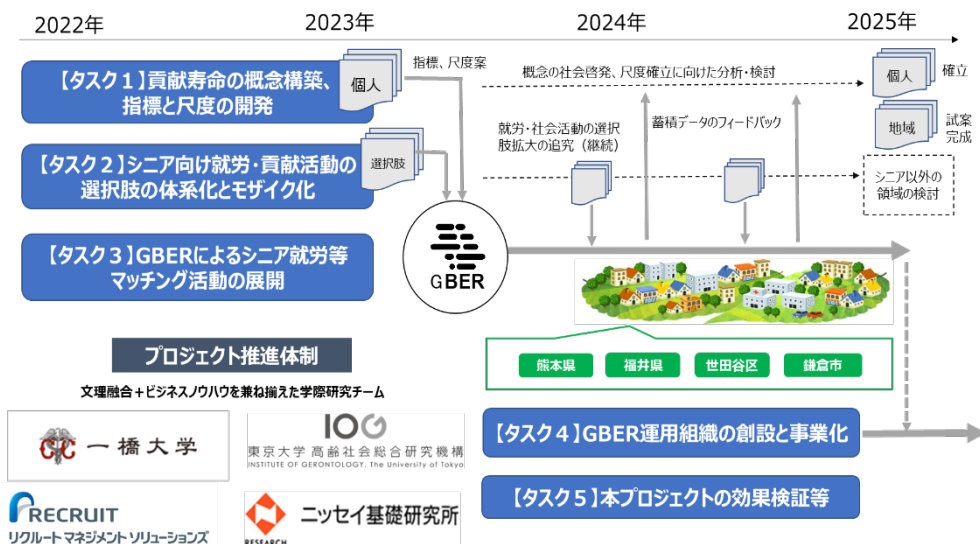
・・・何歳になっても社会とつながり、役割を持って生きる、収入を伴う仕事に限らず、些細なことでも「ありがとう」と感謝される
そうした自分であり続けられる、そうした高齢期の日々を最期まで歩んでいける社会

「貢献寿命延伸への挑戦! ~高齢者が活躍するスマートコミュニティの社会実装~
新たな長寿価値である「貢献寿命」の延伸を目指して、地域コミュニティでの生涯現役社会実現に向けたICT活用事業モデルを確立します!

ねらい1 **新たな長寿価値「貢献寿命」を開発し、社会に広く提唱します!**
ねらい2 **貢献寿命延伸につながるシニア向け就労・貢献活動の選択肢を拡げます!**
ねらい3 **ICTプラットフォーム『GBER』で地域実装を実現します!**

社会的価値・効果	個人	地域社会
	貢献寿命の延伸 <ul style="list-style-type: none"> 健康寿命の延伸 <ul style="list-style-type: none"> 生きがい増進、QOL向上 フレイル予防、認知症予防 ライフデザイン・キャリア形成支援 社会的孤立の回避・予防 	地域力の強化 <ul style="list-style-type: none"> 人手不足の解消(企業・団体) 地域経済の活性化、地域財政の好転 <ul style="list-style-type: none"> 新たな地域イノベーションモデルの構築 SDGs、地域共生社会の実現に貢献

<本プロジェクトのタスクと全体スケジュール>



⁴ 熊本県、福井県、東京都世田谷区、神奈川県鎌倉市(2023年4月現在)

5. プロジェクトの成果

令和4年度における主な成果は下記のとおり（タスクごとに示す）。

（1）貢献寿命の概念構築、指標と尺度の開発【タスク1】

タスク1では、本プロジェクトの中心となる「貢献寿命」の概念構築及び指標と尺度開発に取り組む。令和4年度は、先行研究の精査を行った上で、支援者（4団体）及び当事者（53名）にヒアリング調査等を行い、構成概念の主要な要素抽出までを行った。「貢献」とは何か、そのポイントとして導かれたことは、次の3点である。①他者や社会と主体的に関わろうとする**意欲**をもっていること、②（客観的にみて）社会的な**役割やつながり**をもっていること、③自分の存在や行動（役割）に対して、他者から**フィードバック**を得ることであった。今後も、当該要素の検証を重ねながら、尺度及び指標開発に取り組んでいく。



【目的】多様な「貢献」ニーズと実態を把握し「貢献寿命」の概念構築と尺度開発につなげる

【方法】個別あるいはグループでのインタビュー（約1時間）

【ヒアリング対象】シニア、障害者の就労や社会参加に関する支援者および当事者

・支援者側（4団体）⇒シニア就労支援・障害者就労支援・NPO活動支援・高齢者福祉事業者

・当事者側（53名）⇒就労中/求職中のシニア・障害者、地域活動・ボランティア等従事者、活動に参加していない第Ⅱ層シニア(定年退職経験者), 80-90代シニア

【内容】①就労,社会参加,人づきあいの実態と希望 ②社会とのつながりや貢献を感じた事例

（2）シニア向け就労・貢献活動の選択肢の体系化とモザイク化⁵【タスク2】

タスク2では、貢献寿命の要素に含まれる就労や貢献活動の具体的な見える化（選択肢の体系化とモザイク化）に取り組む。令和4年度は、先行研究及び有識者ヒアリング等を通じて、現下の高齢者就労の現状と課題を整理した上で、本プロジェクトに必要な基礎的情報を得ることを目的に次の3つの調査を行った（①50代向け定年後のライフデザインに関するアンケート、②シニア（60-74歳）向け退職後の暮らし等に関するアンケート、③地域関係者向け「高齢者の仕事等」に関するアンケート）。これらを通じて、50代及びシニア層のライフデザイン等に関する意識や課題、地域における高齢者就労の現状及び活躍が期待される仕事（具体タスク）等について把握することができた。今後はこれらをもとに「選択肢の体系化」を進めていく。

（3）GBERによるシニア就労等マッチング活動の展開【タスク3】

タスク3では、本プロジェクトの目的を具現化する「地域実装」に取り組む。令和4年度は、GBERをすでに展開している前述の4地域において、GBERの利用促進をはかるための住民向け啓発活動、企業・団体向けの説明等の活動を継続した。なお、4地域トータルのGBER利用状況は、登録者数415名、掲載情報件数250件、マッチング件数179件であった。今後はタスク1及び2と連動しながら貢献寿命要素を反映させる機能拡張を行いつつ、GBERを利活用することでの有効なモデルづくりを進めていく。

（4）GBER運用組織の創設と事業化【タスク4】

タスク4では、本プロジェクトの次なるステージ（社会実装）への移行を視野に、GBER運用組織の法人化と事業化に取り組む。令和4年度は、有識者等へのヒアリングを行うとともに内部検討を進めた。今後はより具

⁵ 1つの仕事や役割を細かく分解し細分化すること

体的な検討を深めていく。

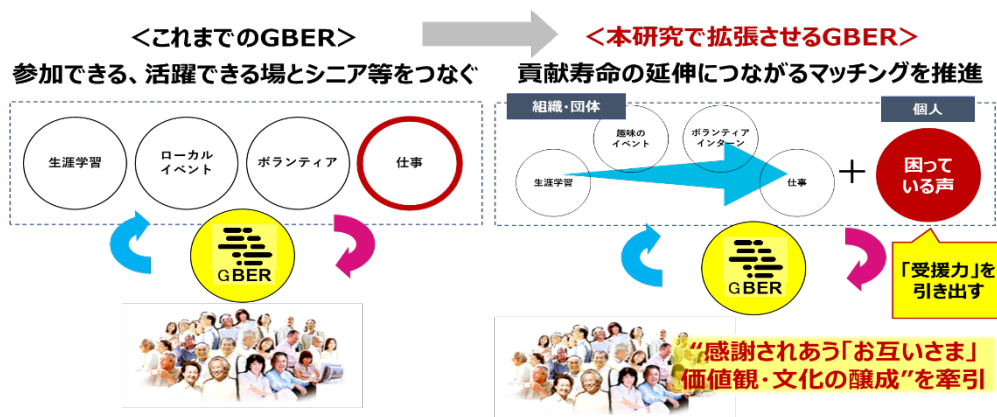
(5) 本プロジェクトの効果検証等【タスク5】

タスク5では、本プロジェクトの効果検証とプロジェクトに関連する個々の課題について研究する。令和4年度では、GBERの運用における労働法制度での課題（リスク）、とりわけ近年増加傾向にある「雇用類似の働き方」（フリーランスやギグワーカー、プラットフォーム等）の国における検討状況を把握しながら課題の整理を行った。今後も労働法制度での検討を深めていく。

6. 課題と対策

本プロジェクトにおける課題は、本プロジェクトが企図する目標、つまり「貢献寿命の概念構築をはかり、GBERを通じて貢献寿命の延伸に向けた社会の変化をより“早く広く”促していくことにある」と受け止めている。そのためにはそれぞれのタスクを計画どおりに進めることはもちろんであるが、とりわけ令和5年度は「**GBERを活用した就労モデル（成功モデル）**」を構築することに注力していく。これは将来的な社会実装（最終目標）に向けた駆動目標（中間目標）の位置づけにあると考える。貢献寿命延伸に向けて社会の変化の気運を高めていくには、GBERの展開地域及び利用機会の増大をはかっていくことが必要であり、そのためにはGBERの利用価値を可視化し、広く啓発していくことが必要である。そこで具体的には、次の3つの分野でそのモデル開発に取り組んでいく予定である（⇒①リビングラボ（Living Lab）⁶、②観光分野、③介護分野）。こうした活動を進めるとともに取組みの状況は、できるだけ社会に広く発信していく予定であり、今後も本プロジェクトへより多くの関心と期待が寄せられることを願う次第である。

＜GBERを活用した就労モデル構築に向けて～GBER 拡張イメージ等＞



⁶ 生活者の視点を中心に地域課題解決やものサービス開発を産官学民のメンバーで共創していく活動のこと。鎌倉には「鎌倉リビングラボ」がある。